

[博士論文審査要旨]

申請者： 積田淳史

論文題目： オンライン・コミュニティにおける協働―協働を支える調整メカニズムの考察―

審査員： 青島矢一

加藤俊彦

西口敏宏

本論文は、ウィキペディアを題材として、オンライン・コミュニティを通じて生産が行われるメカニズム、特に、コミュニティへ参加する人々の活動を調整するメカニズムを、詳細なログ解析を行うことによって、明らかにしたものである。

インターネットの普及に伴って、不特定多数の人々が仮想空間上でやりとりを行うオンライン・コミュニティが様々登場してきた。それらの中でも、特にソフトウェアやサービスの生産を行う生産型オンライン・コミュニティは研究者の高い関心を集めてきた。「金銭的報酬もなく参加者間の活動調整を行う組織も存在しないのに、なぜ生産が可能となるのか」。この疑問にこたえるために、既存研究は、参加者の内発的モチベーションや中核的メンバーの存在に注目してきた。しかし、参加者間の活動が実際にどのように調整されて生産物として結実するのか、その具体的な調整プロセスは未解明のままであった。

こうした中で本研究は、大規模なオンライン百科事典の生産を行っているウィキペディア・プロジェクトに注目し、ネット上に残されたログ情報を詳細に解析するよって、共有ルール、参加者間の議論、第三者による自発的調整が補完的に働くことによって、不特定多数の人々による大規模百科事典の生産が可能になっている様子を明らかにした。

本論文の特徴は、徹底的なログ解析にある。これまでログ解析というと、内容分析ソフトを活用した定量的な分析が多かった。しかし本論文は、「南京大虐殺」のような議論の余地の大きい記事の議論をすべて丹念に読み込み、定量的な解析ではとらえきれない、参加者の相互作用の発展プロセスを解明することに成功している。またこうした定性的な分析は、定量的な内容分析によっても補完されている。さらに、筆者は、匿名性の高いインターネット上のプロジェクトでは難しいとされる、参加者への直接インタビューやアンケート調査も行っており、ウィキペディア・プロジェクトの協働プロセスを多面的に明らかにしている

現象に対する人々の関心の高さに比べて厳密な調査研究が極端に少ない領域に独自に切り込み、学術的な研究として仕上げることに成功した本論文は高く評価することにできる。

一方、本論文にはいくつか課題も残されている。第一に、ウィキペディア・プロジェクトの分析から得られた知見がどこまで他のオンライン・コミュニティに適用できるのか、その境界条件を明確にする作業が必要である。境界条件を明確にできてはじめて、従来の組織論を内包するような一般的な理論構築の可能性が見えてくるはずである。第二に、国際比較の必要性である。異なる言語のウィキペディア・プロジェクト間で、同じ記事の発展プロセスを比較分析することによって、本論文のもつ「日本バイアス」を払拭できるだけでなく、制度的違いの影響を含めた一般性の高い理論構築につながる事が期待される。

このようにいくつか課題は残されているものの、それらは今後の研究に向けた追加的課題としてとらえられるものであり、決して本論文の価値自体を損ねるものではない。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士（商学）の学位を受けるに値するものと判断する。